

駒.zone

第一回

ツイッター対局

金本月子×ぜいらむ

●巻頭作品

ベース オブ シークレット

『五割一分』 スピンオフ

七割未満

将棋詩・将棋短歌

2011

1

First



目次

- 小説：ベース オブ シークレット
将棋短歌：穴熊
写真物語：お城はあきた
将棋詩：3六歩
一番長い日の一瞬
実戦記：特別対局！ 三択将棋
金本月子×ぜいらむ
小説：七割未満

作品紹介
あとがき

題字 Keishogiさん

宝の山から引っ張り出したものは、着々と実用段階に移されていった。とりあえず一番高い買い物はガスボンベで、それ以外のものはほとんど現地調達できた。コンロには火が点いたし、やかんも洗ったらそれなりに綺麗になった。各自家から持ってきたティーパックで、最初の温かい一杯。

三人は顔を見合わせ、大きくうなずいた。いいじゃないか……そういう気持ちだったと思う。

初めてこの場所を発見してから約一か月。地道な努力の甲斐あって、ついに僕たちは快適に過ごせる秘密基地を手に入れたのだ。

「それにしても……謎だよな」

秘密基地の建設に関しては、僕らは何もしていない。見つけた時にはほぼ現状のまま「あった」のだ。汚れてはいたものの、朽ちている、と言ったところはほとんど見られなかった。そして食料や毛布、いくつかの生活用品もあり、おそらく誰かここに住んでいたのだろう、ということになった。

ここに住んでいた人がどうなったのかは、当然気になる。でも、生活の跡はあるものの現在誰か住んでいる様子はなかった。別のところへ行ってしまったのか、あるいは……

しかし僕らは、そんなことを長く気にするタイプではなかった。労なく手に入れた秘密基地。しかも夏休みが迫っている。沢を下らなければいけないものの、距離的にもそれほど遠くない場所にある。こんなにわくわくすることがあるだろうか！

「うん。ここに住んでた人、どんな人だったんだろうね」

最初は仙人か何かかと思ったけれど、見つかるものはすごく俗っぽかった。古い一眼レフカメラ、携帯ラジオ、ゴシップ雑誌、そして数多くのボードゲーム。まるでここには、大学生が複数人で暮らしていたのではないかとすら思えてくる品揃えだった。虫取りや木登りに飽きると、僕らはボードゲームを楽しんだ。セミの鳴き声降り注ぐ中、三人だけ利空間で遊ぶボードゲームは最高だった。

双六やモノポリー、オセロに将棋。僕らはそれらのゲームにバカみたいに夢中になった。誰にも咎められることなくゲームができる、それがうれしくて仕方なかったのだ。もちろん夕方には家に帰らねばならない。でもちゃんと帰りさえすれば、僕らは元気に駆け回っていると思ってくれる。まさか秘密基地でゲーム三昧とは気が付くまい。

「案外、ずっとここに住んで大人になった人だったりして」

三人の想像を組み合わせると、ここに住んでいたのは中学生の時に家出をした男性で、世間とはあまり関わらないままこの場所でずっと暮らしていた、というものだ。ただしいろいろとお金のかかるものがあることから、年に数か月だけ働いていたのではないかと。そしてある日、父親が病気であることを知りここを去って行ったのだ。

「うおー、なんか小説みてえ」

武雄はこの話になると妙に興奮する。ただし、話の内容を考えるのは主に久司だった。

「小説なら、その人がひょっこり帰ってきて僕らと鉢合わせ……するかもね」

「まじかー」

久司は想像力が豊かだ。ただ、たまに現実を忘れてしまうところは欠点なのだが。

「あ、もう五時だ。帰らなきゃ」

僕の役目は、この二人を引っ張っていくことだ。武雄は走り出すと、久司は考えだすとなかなか止まらない。僕はたいして得意なことはいないけれど、いつでも時間を気にするぐらいならできる。

「早いなー。また明日来ような」

「そうだね」

「さあ、帰ろう」

帰り道は少し切ない。別に家が嫌いなわけじゃないけど、どこか心が落ち着かない。そんな毎日の繰り返し、だった。

「見つけたー」

突然の声に僕らは動きを止めた。だるまさんが転んだ、をしているみたいになった。入口からこちらを覗く二つの顔。一つはよく知っている。近所に住むヨオコだ。散髪屋の娘で、親同士が仲がいいのでよく遊んだ。少し黒めで、髪はさらさらと肩まで、そしてひょろっと手足が長い。

もう一つの顔は初めて見る。色白で顎が細くて、くせっ毛を強引に後ろで束ねている。ヨオコの後ろに隠れるようにしているが、見たことのないようなきれいな顔立ちで、どうしても目をひかれてしまう。

「なんだよ、ヨオコ。何しに来たんだ」

最初に呪縛から解かれたのは武雄だった。

「最近静かだからおかしいと思ったの。夏休みは毎年うるっさくしてるのに」

ヨオコは腰に手を当てて仁王立ちだ。まるで僕らは容疑者のよう。

「その子は誰？」

そう聞いたのは久司。僕と同じ疑問を持っているようだ。

「従妹の冬美。しばらくこっちにいるの」

「……お世話になってます」

控えめな様子、上品な感じ、すべてが新鮮に見えた。彼女は都会から来たに違いない。僕がこれほど想像しているのだから、久司の中では目くるめく物語が出来上がっていることだろう。

「それにしても、こんなものよく作れたものねえ」

「最初からあったんだよ。作れるわけねーだろ」

「考えてみればそうね」

「三人で協力して、掃除したりしたんだよ」

「ふうん。じゃあ、手伝うわ」

三人は顔を見合わせた。

「何よ、私たちはのけ者にする気？」

「いやそういうわけじゃないけど……どうする？」

こういう時に武雄には決断力がない。僕の出番だ。

「どうせ断ったって引き下がらないだろ。その……せっかく従妹も来てるわけだし、みんなで楽しもう」

「さすが話が分かる。いいわね」

「わかったよ」

「了解」

そんなわけで、三人の秘密基地は、五人の秘密基地になった。

七日間、という区切りが重要な意味を持つようになった。冬美ちゃんがここにいられる時間だ。

冬美ちゃんは僕らよりも一歳年下で、帰国子女らしい。日本には一時帰国していて、イギリスに戻らなければならないのだという。都会どころか外国だった。

「じゃあ、英語話せるの」

「はい。あとメキシコにもいたので、スペイン語も」

「すごい……」

冬美さんはボードゲームに興味を持って、控えめに笑いながら楽しんだ。日本でしか手に入らないものも多いようだし、何よりご両親があまりそういうものを買ってくれないのだそう。

ヨオコは家から立派な釣竿を持ってきた。父親のものらしく、大きなリールが目立つが、手入れはあまりされていないようで汚い。

「倉庫にあったから持ってきた」

「すげー」

僕らが竹から作ったものとはまるで違う。冬美ちゃん以外はすごく興奮した。

「あの……」

「どうしたの、冬美」

「えーと……魚って、川にもいるの？」

冬美ちゃんのとんでも発言に皆しばらく顔を見合わせた。

「えーと」

困るヨオコ。

「そっか、イギリスには川がないのか」

おかしなことを言う武雄。

「今から、実際に釣れるところを見に行こう」

建設的なことを言う久司。そんなわけでみんなで釣りをすることになった。

小さな滝壺があり、腰掛けられる大きな岩がある場所。昔からそこが僕らの釣りスペースだった。

「冬美ちゃん持ってみなよ」

武雄が強引に釣竿を持たせる。

「こ、こうですか」

「そうそう。浮きをよく見ておくんだ」

と、最初はいろいろと教えることがあったのだが、結局は待つしかない。竿が一本しかないので、みんな暇になる。

「ひょっとしたら、本当に川には魚いないのかもねー」

一番最初に飽きたのはヨオコだ。自分が持ってきたのに釣竿を使えないので拗ねているのかもしれない。

「あっ」

と叫んだのは久司だった。視線の先は浮き……動いている！

「おっ、ほら、引いて」

「え、え」

武雄が必死にサポートしようとするが、冬美ちゃんはおろおろしてなかなかうまく糸を巻けない。結局武雄がリールを巻き始めた。

そして僕は、冬美ちゃんの後姿をずっと見ていた。白いワンピースが似合うだなんて、なんて素敵なんだろう。

何とか釣り上げられたのは、あんまり大きくない魚だった。

「マスかな」

よくわからないけど、久司が言うならそうなんだろうということになった。そして、次に竿を握ったのはヨオコ。待ってましたという感じだ。そして武雄が続けて指南をしている。

「なんか疲れちゃいました」

冬美ちゃんは、僕と久司の方を向いてはにかんで見せた。かわいすぎた。

「戻ろうか。釣れることはわかっただろ？」

「はい。私、釣りは苦手だと思う」

「久司は」

「僕はもう少しいるよ」

「そっか。じゃ、いこっか」

平静を装ったが、ドキドキしている。僕のすぐ後ろをついてくる冬美ちゃん。今から、二人っきり。

「あのね……これ教えてほしい」

小屋に戻るなり冬美ちゃんが指差したのは、マグネットの将棋セットだった。久司と少しやってみたものの、なかなか終わらなくてやめてしまった。動かし方はわかるのだが、いまいち熱中ではできない。

「なんでこれを？」

「前、友達に聞かれたの。日本人だから知ってるでしょ、教えてって」

「へー」

外国人は意外なことを知りたがるものだ。まあ、忍者の秘儀を教えてくれと言われるよりはましか。

「じゃあ、やってみようか」

盤を広げ、薄っぺらい駒をつまみ上げていく。

「同じように並べていって」

「うん」

僕の真似をしていく冬美ちゃんだったが、飛車と角の位置を逆にしてしまった。どちらでもいいと思ったようだ。

「角が左なんだ」

「なんでかな」

「なんでだろう」

理由を考えていたらよくわからなくなる。とりあえず先に進むことにした。

「歩はね、一つだけ前に進めるんだ」

「うん」

一つずつ、実際に動かして教えていく。冬美ちゃんも、真似をして動かす。だんだん頭と頭が近寄ってきて、なんかいいにおいがしてくるような気がする。

「で、相手の駒と同じところに進んだら、取ることができるの」

「そうなんだ」

「で、自由に空いたところに置くことができるんだよ」

「すごい」

ルールを教えるだけだけど、結構時間がかかってしまった。こんな時間ならば、いつまで続いたっていいのだけれど。

「じゃあ、やってみようか」

「うん」

実際に対局を試してみる。冬美ちゃんはまだ動かし方を覚えきれていないのか、たまに動けないところに駒を動かしてしまう。そのたびに訂正して、もう一度手を考えてもらう。一局終わるのに一時間ぐらいかかった気がする。

「あー、負けちゃった」

「でも、接戦だったね」

「そうかな。もう一回やろうよ」

「うん」

二度目の対局、駒がぶつかり始めた頃。

「あっ、何してんの」

ヨオコの声だった。そのあとさらに二人分の足音。みんなが帰ってきた。

「将棋」

「へー。そんなのまであったんだ」

「おっ、面白そう」

武雄も興味があるようだ。

そのあとみんなで将棋を試みたが、すぐにヨオコは飽きてしまい、武雄も勝てないので「おかしい！」と言って無理やり久司とヨオコを誘って別のゲームをし始めてしまった。結局再び僕と冬美ちゃんでは将棋を続けることになった。

「そろそろ帰ろうか」

いつもは僕が言うセリフを久司が言った。夕方になっていた。

「また明日……教えてね」

「うん」

気分は、もう明日だった。

毎日が同じように楽しく過ぎていくわけではない。冬美ちゃんがいられる時間は決まっているのだ。

僕は昼ご飯を食べ終わると、一直線に秘密基地に向かうようになった。一度待ち合わせる時間をも惜しむようになったのだ。中でも僕は早めに向かった。最初に小屋に入り、こっそり見つけた将棋の本を読むのだ。すごく古くて、髪は黄ばんで今にも崩れそうだった。書いてある中には読めない漢字もあった。それでも今まで知らなかった知識がいっぱい書いてあり、僕はむさぼるように読んだ。そして冬美ちゃんに、得意げにそれを教えるのだ。

「すごーい。全然攻められないね」

冬美ちゃんかが一番驚いたのは、「美濃囲い」というものを作った時だ。たぶん、「みのうがこい」と読むと思うのだが、簡単に作ることができて、その上とても王将が安全になる。

「もう、将棋ばっかりして。大富豪しようよ、大富豪」

ヨオコはトランプが好きだった。武雄もそれに合わせているし、久司はトランプに対して何かしらの探究心を持っているようだった。

「わかった、じゃあちょっとだけ」

「またあとでだね」

あまりにしつこいので少しだけのつもりで参加したら、熱中してしまった。大富豪には終わりが無い。

気が付くと夕方だった。

「あのね……明日は、早く来る」

帰り際、僕にだけ聞こえる声で冬美ちゃんは言った。

「うん、僕もそうするよ」

そう、明日は七日目。冬美ちゃんが来られる、最後の日。

風の音が、少し大きかった。沢の水の流れも、早い気がした。空は曇り空。

小屋の扉を開けると、冬美ちゃんはすでにいた。小さな口を大きく開けて、おにぎりを食べていた。僕が入ってきたのに気が付くと、あわてて空いている方の手で口を隠した。

「あ、……こんにちは」

ちょっともごもごとしながらのあいさつ。とってもかわいかった。

「早いね」

「最後の日だからいろいろ見て回りたいって言ったら、お弁当作ってもらえたの」

「ヨオコは？」

「まだ寝てた」

二人でくすくすと笑った。そして冬美ちゃんのご飯を食べ、僕は将棋盤に駒を並べた。最後の一日。そして、最後の二人だけの時間。

「はじめよっか」

「よし」

将棋を始めて、いつもより少しだけ口数が少なめになった。ここに来れなくなるだけでなく、冬美ちゃんは日本からも離れるのだ。今この瞬間を、大切な思い出にしたいと思っているんじゃないだろうか。僕も、精一杯その手伝いをしたい。

風が扉をたたく音が大きくなってきた。そして、肌に少し湿り気を感じる。窓から外を覗くと、雨粒が見えた。みるみるそれは勢いを増し、あっという間に大雨になった。

「急だね」

「すぐやむかな……」

冬美ちゃんにとって、日本の気候は全て未知数なのだろう。だけど、僕にもこの雨がどうなるかなんてよくわからない。

「とにかく……雨漏りしないといいな」

「今のところ大丈夫そう」

「みんな……来れるかな」

この雨では足元も危ないだろう。傘を持ちながらの移動も危険だ。

「このままだと来れないかなあ。すぐやんだらいいけど」

「だといいね」

僕たちもこのままでは帰れない。いつもより暗い部屋で、とりあえず二人は将棋を始めた。

「なんか、すごい強くなった気がするな」

「そうかな」

二局ほど終わった時だった。部屋の中が一瞬真っ白になった。二人の動きが止まった。そして数秒後、ドーンという大きな音とともに、小屋全体がびりびりと揺れた。

「ワッ」

冬美ちゃんは体を揺らして、そしてとっさに僕の手をつかんだ。僕もとても怖かったけれど、なんとか「大丈夫だよ」と言って、笑顔を作った。

それから何回か、雷は続いた。将棋どころではなかった。そして、当然誰も来なかった。二人は世界から取り残されているかのように、不安に顔をゆがめていた。

どれぐらいの時間がたっただろうか。雷は鳴らなくなり、小屋全体が静寂に包まれていた。窓から外を覗くと、雨脚も随分と弱まっている。

「やんだら帰ろう。みんな心配してるだろうし」

「そうだね」

雨はどんどん小降りになり、降らなくなり、ついには日の光まで差してきた。世界は、嘘みたいに明るくなった。

「もうちょっと、みんなといたかったな」

「もう、ここに来ることはないの？ 来年は？」

「日本には来るかもしれないけど、ここまでは……。先のことはわからない」

あまり考えないようにしていた。毎年、夏休みは終わらないつもりで遊んでいた。そして今、この日、冬美ちゃんとの最後の時間だということも受け入れられていなかった。

「わからないなら、来れるかもしれないよね」

「……うん」

「じゃあ、またここで会えるかもね」

「……うん」

「もっと教えられるように、将棋強くなっとくよ」

「……うん！ 私も、何とかして勉強しておく」

「じゃあ……これ持ってきてきなよ。僕はどこかで買うから」

最初からぼろぼろで、そしてさらに使い込まれた将棋の本を、僕は冬美ちゃんに渡した。

「いいのかな」

「いいよ」

扉を開ける。日常へと戻る、出口。

「またここでね。たとえ十年後でもさ」

なんでそんなことを言ったんだろう。でも……言わずに後悔するような人間じゃなくてよかった、と思った。

「うん。またここで」

埃を掃き集めて、外に捨てる。月に一度ほどは掃除しているとはいえ、使っていないとすぐに汚くなってしまう。

僕だけがここに残った。大学、就職、夢を追っての上京。いろいろな理由で、みんなが旅立っていった。

だんだんと、それはただの習慣になっていった。何かにすがって、信じ続けて、頑張り続けるような人間ではなかった。この秘密基地を守り続けることで、自分を見失わないでいられる気がした。みんなのように大きな目標は持てなくても、大丈夫だって安心したかった。

腰を掛けて、折り畳み式の盤を開く。九年前、お年玉で買ったものだ。今思えばおもちゃなのだが、当時は木の盤というだけでとてもテンションが上がった。駒袋から駒を取り出す。駒も平べったい、字をプリントしたもので、せめてもと思ってあとでいい駒袋を買ったのだ。その後バイトもするようになって新しいものを買う余裕はあったけれど、結局ずっとこれを使っている。

駒を並べていく。何回も繰り返したこの作業。僕は、棋譜を並べるのが好きだった。一つ一つの棋譜が、オリジナルの物語だと思った。途中で難しいことは考えずに、ただただ再現していく。それが楽しい。

携帯電話を開いて、モバイルページに接続する。昨日行われたタイトル戦の棋譜を検索。今日この場所で並べるために、見るのを我慢していたのだ。

今、一番強い人たちの将棋。やっぱり、迫力が違う。

中盤から、よくわからない手順が続く。次の一手が全く予想できない局面で、手が止まる。きっとここが勝負どころだ……

「昨日の将棋だね」

耳の後ろから、すっと手が伸びてくる。白くて細くて、それでいてピシッと伸びていて。その手は飛車をつかみ、自陣に打ち付けていた。まったく予想外の、相手の攻めを封じ込める一手。

「見てたんだね」

「昨日、日本に来たの」

振り返り、ちょっと驚いた。そこにいたのはもちろん大人になった彼女で、それは予想していた。けれどもすらっと背が高く、肩まである髪はウェーブしていて、とっても知的な顔で。記憶の中の少女が、こんな風に成長するとは思っていなかった。

「それでここまで来たんだ」

「私、約束は守る方だから」

彼女が帰国すると知ったのは二週間前。アマチュアの女流棋戦に海外招待選手が呼ばれることになって、そこに彼女の名前があったのだ。見つけた瞬間は飛び上るほどびっくりしたけれど、すぐに言い知れぬ喜びに変わっていた。

僕はどこかで、確信していた。どれだけ時間がかかっても、この日が来ると。

「時間はあるの」

「うん。今日は大丈夫」

「じゃあ、指そうよ」

「うん」

僕の前に座る彼女。真っ白なワンピースだ。

「ちょっと待ってね」

急いで棋譜を並べて、そして二人で最初の形に駒を並べ直す。

十年ぶりだ。

「なんか変な感じ。あの頃と変わらないね」

そう言って、冬美ちゃんが最高の笑顔を見せてくれる。確かにこうしていると、子供の頃の気持ちがよみがえってくるようだ。

だけど。確実に一つ変わったことがある。あれから僕は、頑張って将棋の勉強をした。いつの日かこうして対局できるとき、しっかりと教えられるように。そして、アマ初段の免状をとった。それを見せて、少しは自慢しようと思っていた。

でも、冬美ちゃんの方が頑張っていたのだ。彼女は海外で一番強い女性になって、ここに戻ってきてくれた。教わるのは、僕の方だ。

窓の外は、太陽の光であふれている。夏の日、秘密基地で、最高の思い出に、最高の思い出を重ねていく。

「お願いします」

「お願いします」

大人になった二人はしっかりとお辞儀をして、対局を始めた。きっとずっと、忘れない一局になる。

将棋短歌

「穴熊」

ソッコーで穴熊になる君が好き僕も勝ちたいキミに勝ちたい(半島)

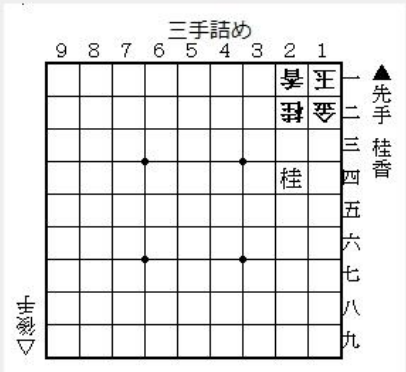
ドカボンといやらしい将棋でこんなにも友達なくしたことに気付いた(半島)



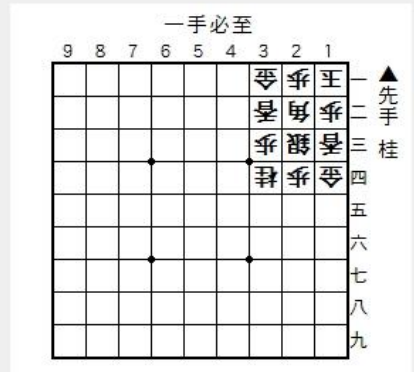
春までは何にも見たくないんです炬燵布団で穴熊作る(落波)

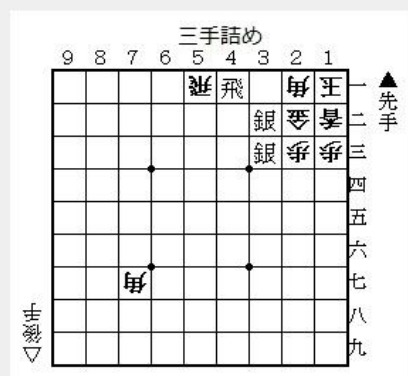
その部屋に逃げ切られたらおしまいで藤井システムみたいに追った(落波)

午前七時J・R山手線でふと気付く穴熊の玉苦しそうだな(半島)

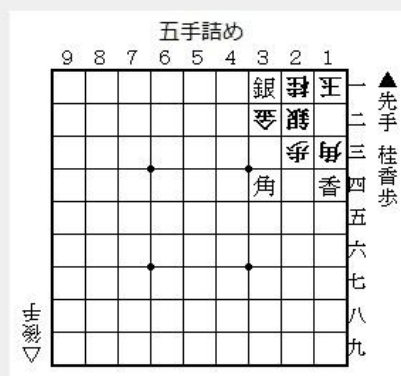


穴熊への一手必至の桂馬だろ！オッサンの吐く熱い吐息は！(半島)





頑なに籠る心の防衛線越える魔法は正しい手順で(落波)

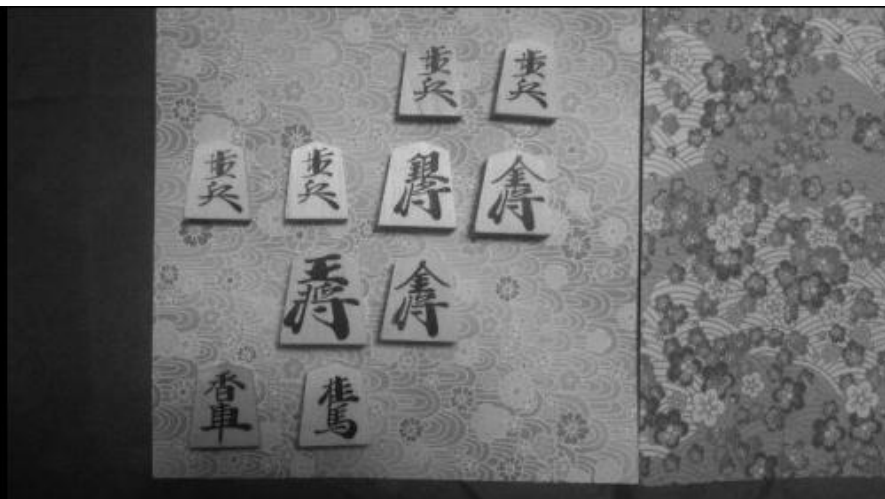


少しでも心開いた瞬間に香りで止め刺してみたいな(落波)

お城はあきた



まいにちお城の中で
王様はあきていた



ある夜……



王様は逃げ出した



だれにも
気づかれなかった



.....

はずだった





左香が
お供することになった



朝になった



向こうから
変な三人組がやってきた

真っ暗になりましたね

真っ暗になったな

つづく

傷つけ合うことは基本楽しい
認め合わなければ殺し合いになるから
二人は出会いを歓びに変える
それでも時に
絶望が片側を闇で照らす

盤上で日は暮れる
ぶつかり合う鎧
安心していた心の隙に
見たこともない槍が刺さる
痛みを感じる暇もない
秒は有限を刻々と知らせる
汗も唾も涙も全て
逆流するほどの熱が来た

突き出されたものは
受け止めねば ならない
与えられたものには
答えを返さねば ならない
けれど
時に残酷に痛みは一方的に
覆いかぶさってきて
世界を停止させて
そして
未知の歓びを植え付けていく

二人の逢瀬が過ぎて
戦場は風に飲まれる
3六歩という歴史は
未来の引力を倍増させた
再び傷つけ合う

戻れないことも
理解できないことも
後ろ向きになっても
力の限りで
悔いながらも
没頭するしかない

まだわからない
類似局面の中で
やめてしまえばいいとか
待ってほしいだとか
わかりはしないだろう
たいしたことはない
などと言い捨てても
弁解は見苦しい

ただ、止まらない
逃げても、逃げ切れない
崖っぷちでも
忘れてしまっても
ごくまれにある希望へと
浮かび上がっていく心は
誰だって望むことだろう

楽しんだのは昔のこと
悲しんだのは昨日のこと
儚いのはいつものこと
信じられない全てのこと
不誠実で切り拓いていけ
時間に追われ限界を超えて
今しかない先端を追え

禁じられた扉を開けて
無定型の果てで探す
羅針盤は壊れてしまった
未完成の城壁の手前
受け取った天命
来期へと橋を渡す

灰色を自分色に染める
ぶつかった瞬間の想いを込めて

金本月子(以下月子)

えー、皆さんこんにちは。『五割一分』という小説に登場する金本月子と言います。今回『駒.zone』創刊を記念して、ツイッターで大人気のぜいらむたん(@Zeirams)と特別ルールでツイッター対局することになりました。

今回の特別ルールは、「三択チャンスルール」

下手が好きな時に三択チャンスを宣言すると、上手は候補手を三つあげます。下手はそこから好きな手を選ぶのです。

三択チャンスは三回。.....このルール、実は重大な不備があったのですが.....とりあえず、対局の方を見ていきましょう。

ぜいらむ ▲7六歩

月子！ぜいらむが勝ったら月子が一昨日履いてた虎縞のニーソもらおうお！だから手加減してね♡

(※ぜいらむたんの中では、私は「ツインテールでニーソという設定になっているのです.....)

あれ？全然反映されてないんだよ？ (twitter 将棋)

...と思ったら始まった。

月子 ▲3四歩

ニーソネタで押し切らないでくださいね！

(※実は二手目が悪手。角交換されたら取る駒が二つしかなく、ここで三択チャンスを使われていたら角損になるところでした。三択ルールはどうやら無理があるようで.....)

ぜいらむ ▲7五歩

この対局は「駒.zone」に掲載予定とのことなんだけど月子のコーナーはないの？巻頭グラビアとか。

月子 ▲3五歩

コーナーは企画しているのですが、私にするかさくらさんにするかで作者は悩んでいるそうです。.....グラビアは.....えーと.....

(※「さくらさん」は『レイピアペンダント』という小説の主人公)

ぜいらむ ▲7八飛

おかしい。月子は原作では居飛車党だったはずなのにっ！何か Sui / Shogi の匂いがするっ！

(※「Sui / Shogi」は作者のホームページ。将棋を心理学的に解析.....したりしてるんでしょうか?)

月子 ▲3二飛

作者が石田嫌いなのは.....関係ないですよ？

(※嫌いです)

ぜいらむ ▲5八金左

相矢倉を指したかったのに（嘘だけど） 作者が気難しいせいで（ぼそっ）

三択チャンスのルールを【全く】把握してなかったし ww 月子さんのツイートを遡るなど。

月子 ▲4六歩

とりあえず.....成り行きに任せます

(※ぼけてました)

ぜいらむ

4六歩はどこから飛んできた www?

月子 ▲4四歩

失礼しました。モニターをひっくり返して見たいです.....

ぜいらむ ▲6六歩

さっきので反則負け終了だったら「駒 zone」休刊のお知らせだったね。

月子 ▲8二銀

.....盤に着手しない限り、大丈夫と教わりました。ええ、ええ。

ぜいらむ ▲6八銀

ふと思ったんだけど、角道とめたのは三択ルールの穴に気づいたぜいらむを信用してないってことだねっっ！ひど

い！

(※.....正解です)

月子 ▲6 二王

いやーまさかーそんなことないですよー。しいて言えばルールの不備に気付いていなかった作者のせいです.....

(※システム上後手の王将は「王」で表されます)

ぜいらむ ▲6 七銀

質問！月子さんは里見さんみたいに詰め将棋毎日解いてるの？ぜいらむは毎日妖怪絵を眺めてるけど。

月子 ▲4 二銀

枕元に本を置いていて、一問解けてから布団を出るようにしてます。あと、移動中は解いていることが多いかも.....

(※私は師匠である三東四段の家に居候していて、ロフトで寝ています)

ぜいらむ ▲4 八玉

ところで、月子は、自分が師匠より遥かに遥かに遥かに強いって、いつ気づいたの？ま、まさか、一目会ったその時とか？

月子

そうですね.....二段に上がったころ、練習将棋で勝てるようになりました。.....今夜はここまでで、封じ手にしてよいでしょうか。

(※『五割一分』内では、師匠は最弱若手棋士という設定になっています.....)

ぜいらむ

そうか、先生は二段か（ぼそっ あ、封じ手とかいつでもいいよん。無言で去っても OK。のんびりやりましょ。「駒 ZONE」発行はどうせまだまさ先だし（お



そんなわけで一日目はここまで進みました。ご覧の方は思うことでしょう.....「ぜいらむたん、ハンデ要らないんじゃない？」

三択チャンスの恐怖に怯えつつ、慎重に駒組みを進める私。さて、この後どうなるでしょうか.....

月子 ▲4 三銀

おはようございます。では、続きをお願いします。

ぜいらむ ▲3 八銀

おはよう！...なるほど。今日はピンクのニーソか。

月子 ▲5 二金左

.....どこまでニーソ好きなんですか。

ぜいらむ ▲9 六歩

三択チャンスが来るまでじっくり行くか、それとも自ら動いていくべきか、それが問題だ。【たったの】3回しか使

えないし！今日のニーソはピンクだし！棋王戦が凄いことになってるし！

(※この日棋王戦第二局が行われていました。戦型は対ゴキゲンの5二金右急戦で、ものすごいスピードで進んでいました)

月子 Δ3 六歩

そうですね、どこで使うかによって(笑いの)センスがわかりますよね。

ぜいらむ ▲3 六歩

ええっ！？笑いをとらなきゃダメなのっ？(;´Д`)

月子 Δ3 六飛

このままじゃ「ニーソコーナー」って言われちゃいます.....

ぜいらむ ▲7 四歩

わかった。ツインテとビキニについても検証してこうじゃなイカ？ところで笑いの取れる三択チャンスが中々来ないんだよ？

月子 Δ7 二金

.....結構どこで使われても大変な気が.....あとビキニは絶対にありませんから。

ぜいらむ

なんだ！スク水だったのか！！（駒 zone 的にどこまでセーフなのか？）

月子

.....今ツーアウトぐらいでしょうか.....

ぜいらむ

笑い話を2つ。PC 前に復帰したら棋王戦が終わっていて嬉しくてニヤニヤ笑い。でもって、ここで「三択チャンス」宣言しようとしたら Twitter クジラさんが大暴れして一人で爆笑してた。

▲7 三歩成

やっと動いた！「三択チャンス！」「三択チャンス！」「三択チャンス！」（3回言ったっ）

月子

.....うーん ①同銀 ②同金 ③ 同桂ですね.....苦難の時代が始まりそうです.....

(※ここでの宣言は少し優しさを感じました)

ぜいらむ

なぜそこで「6 一玉」とか「5 一玉」を候補にあげてから後で涙目うるうるでごめんなさいする、という展開にできなかったのか？ごめんなさいしても許さなかったけど！

月子

プロとは決してあきらめない生き物だからです。

ぜいらむ

くっ...ツインテールでドヤ顔するとは！？.....③同桂 ですね (*・▽・)

月子 Δ7 三桂

さ、指したくて指してるわけじゃないんですからね.....

▲ぜいらむ歩二

香						桂	香	一
	銀	金	王	金		角		二
歩	歩	桂	歩	歩	銀	歩	歩	三
					歩			四
								五
歩			歩			銀		六
	歩		銀	歩	歩	歩	歩	七
	角	飛		金	玉	銀		八
香	桂				金		桂	九

二歩士目▽

ぜいらむ ▲8六歩

ただいま！しかし Twitter 将棋楽しいねえ。まとまった時間が取れない人でも指せるし、三択チャンスは4回もあるし。「駒.ZONE」でその魅力を伝えねば！

月子 ▲4 五歩

.....そうですね。

ぜいらむ ▲5 六銀

4 五歩は、何かすごくイヤな予感がする。頭突きが飛んできそうな悪寒がする。。

月子 ▲4 四銀

.....「俺の小宇宙よ、奇跡を起こせ！」と叫ぶと元気が出る、と師匠が言ってました.....頑張ります.....

(※作者はそういう世代なのです)

ぜいらむ ▲8 五歩

ググってしまった。小宇宙と書いてコスモと読むんですね。ぜいらむはコスモより KOS-MOS の方が好き。なんだよ。

月子 ▲3 六歩

私もググりました。KOS-MOS と書いてもっこすと読むんですね。

ぜいらむ ▲3 六歩

もっこすとか言うと、作者が怒って続編書いてくれなくなるよ！

月子 ▲5 五銀

そうなんですか.....どんな意味が隠されているのでしょうか.....

ぜいらむ ▲7 二飛成

うん、そのうち作者から怒りのリブが来ると思うんだ。

その銀はびっくりした！毒まんじゅうは取らない！ニーソは取るけど。

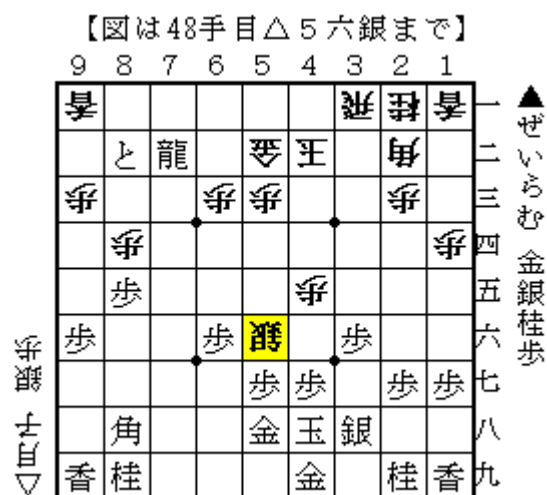
らくは

「もっこす」禁止！

(作者は KOS-MOS ファン)

月子 ▲5 六銀

恐ろしいことに歩以外の駒をようやく取れた気が.....。作者に怒られたので KOS-MOS の話題は止めます.....



ぜいらむ ▲5 六歩

ふと思ったんだけど「三択チャンス3回」ってサッカーの選手交代枠と同数でいいね。最後の1回はキーパーの負傷に備えて取っておこう.....。

月子 ▲8 七銀

こちらは負傷者続出です.....

ぜいらむ ▲5 五桂

月子怪我したの？唾つけてふーふーしようか？（←変態）

月子 ▲5 五角

自覚は.....あるんですね.....

ぜいらむ ▲5 五歩

デカルトの「我、変態と思う故に我あり」という有名な言葉があつてですね...

月子 ▲8 八銀不成

ぜいらむさんはパスカルさんが言うところの「考える脚フェチ」ですよ.....

(※細かいところですが成ると9七角を打たれると思いました)

ぜいらむ ▲1 六角

そうそう「人間は足のことだけ考える奴である」ってやつ。

月子 ▲3 四歩

棋士は結構手に気を使ってますね。

ぜいらむ ▲4 四銀

ふーん。そうか！NHK 杯戦で TV に映るからだ！...そろそろ月子もマニキュアとか.....

月子 ▲4 三桂

お金のかかるものは避けてしまう癖が.....

ぜいらむ ▲5 四歩

うん、月子のそういうとこ好きよ♡よし、この対局でぜいらむが負けたらマニキュア買ってあげる！ところで、ここで最後の「三択チャンス」「三択チャンス」「三択チャンス」（重要なので3回言った）

月子

え.....ここで？ うーん ①6 四角 ②同歩 ③投了 です.....

ぜいらむ

うーん、ぜいらむは2が好きなので②同歩で！

月子 ▲5 四歩

情けも容赦もないことですよ.....

ぜいらむ ▲5 二竜

ぜいらむは、月子のニーソがどうしても欲しいんだー、だぁーだぁーだぁー（最後エコーで）



月子 参りました

取っても並べ詰みですね。ありがとうございました。

そんなわけで@Zeirams さんとの対局が終わりました。わかったこと.....①三択チャンスは、厳しいです。初心者への指導にはいいかも。②ぜいらむさん、有段者でしょ。③ぜいらむさん、どSで変態。

ぜいらむ

ありがとうございました m(。)m (一応、挨拶だけはちゃんとする) ...えーと、感想戦は？

もっと褒めて！...あと自分の段とか級とか知らないの！（←これは本当）

月子

感想は.....ルールが厳しかったですね(泣)序盤から角交換や、終盤では1 二金や3 四桂も受かりませんでした。居飛車で受けていたらもっと早く終わってた可能性大です.....

ぜいらむ

あ、そうか！両取りかけて三択すればよかったのか！あそこだけ真面目に寄せを考えていたぜいらむのバカ w
三択はミスした時まで温存する予定だったんだけど、7 二玉を保留して7 二金の余地を残しながら飛先交換してくる上手すぎる手順を見て気が変わりましたのよ。第2局は三択2回ですか？

月子

二択二回が限度でしょうね.....(中の人をこっそり本物のプロに変えろとかしないと.....)

ぜいらむ

うーん。二択5回か、三択1回ではどうだろう？

月子

二択五回(° 月°) まじめに考えるとそれ、飛車先突破とか受かるんでしょうか.....「平手でできるちょっとしたハンデ戦」のアイデア、また考えておきます。

というわけで、今回は私がぼろ負けしてしまいました。このルール、相当棋力差がないと成立しませんね。皆様もアレンジしてぜひ使ってみてください。

そしてぜいらむさん、企画へのご協力ありがとうございました！

それでは、機会があればまたお会いしましょう。

登場人物

金本月子(@tsukiko_sann)

ぜいらむ(@Zeirams)

作者(@rakuha)

籠城の果てに目覚めた寒い朝に美しく響けシユプレヒコール（半島）



朝、気が付くと何かがおかしかった。いつもと空気の感触が異なる気がする。目を開ける。薄暗くて、それでいて生暖かい。外は大雨か何かだろうか……と思って、ようやく思い出した。そういえば、カーテンを買ったのだった。

一人暮らしを始めて一年。昨日まで我が家にはカーテンがなかった。日の出とともに目が覚め、コーヒーを飲み、散歩して、朝食をとる。その繰り返しだった。それが今日はいつもなら朝食を食べ終わっている時間まで寝てしまった。カーテンの威力は恐ろしい。

何となくテレビをつける。これも二か月ほど前に買ったものだ。普段はDVDを鑑賞するぐらいにしか使わない。主にロックやクラシックをBGMとしてかける。面倒な時はそれもパソコンで済ます。

今日はなぜかいつもと違うことをしたいと思った。着替えるため、クローゼットを開ける。非常に大きめの備え付けのものだが、がらんとしている。普段は制服で過ごすことが多い。何となく対局もそうしている。実際には高校はほとんど行っていない。行った方がいいと言われたものの、何も楽しさを見いだせなくなってしまった。何より、行かないことを誰にも咎められない。それでは張り合いがない。

外の世界には、敵が少なすぎる。

俺自身は、自分はしょうもない人間だと考えている。たまたま将棋が強かっただけで、本当はみっともない、まだまだいろいろと勉強しないとイケない人間だと。でも、将棋が強いことで、将棋をがんばることで、将棋でプロになることで、全てが許されてしまった。だから、将棋だけは手を抜けない。

しばらく着ていなかったパーカーを身にまとう。なんかこういうのが若者っぽいんじゃないだろうか。昨日届いたばかりの詰将棋の雑誌を鞆に入れる。知らない街の初めてのレストランで、これを読もう。なんとなく、ワックスで髪も固めてみた。自分で言うのもなんだが、俺は結構かっこいいと思う。ただ、そんなこともどうでもいい。顔で名人が取れるわけじゃない。

家を出る。次の対局のことを考える。三日後、ベテランの先生と。中身のことをあれこれ考えることはしない。先後もわからない中で、予想で一喜一憂しても仕方ない。ただ、負けると勝率七割を切ってしまう。それだけは避けたかった。とびぬけた実績もなく、C級2組で、それでいて一流を目指すには勝率七割が最低条件。それは、自分に課した重たい枷だった。

十代でデビューした先輩が、苦しむ姿を見ている。気を抜けばすぐにその他大勢だ。正直、そうなるのは怖い。俺にとって、この世界だけが希望なのだ。上を見れなくなったら、ただのつまらない人間になってしまう。

名人になれるなら、負け越したっていいとすら思う。ただ、今はとにかく、七割勝たねばならない。

午後四時の控室。奨励会員が二人、興奮しながら局面を検討している。

対局はあっさり終わった。終盤に入った途端、相手がぽっきりと折れた、という感じだった。

七割は守られた。

「どうしたんですか？」

二人とも先輩だ。僕は丁寧に尋ねた。

「いやこれね、金本さんの将棋なんだけど」

「金本さん……ああ、女の子の」

最近入会した女性の話は聞いていた。別に女性が将棋をするのはそんなに珍しくはないけれど、何より話題になったのが「誰も知らない子」だったことだ。普通奨励会を受けるような子は何かしらの大会で活躍しているもので、同年代には名前を知られている。しかし金本さんは、全国大会の実績ゼロ、地方の大会にも出場したことがないという話だった。師匠の三東四段はまったく成績の良くないぱつとしない若手だし、いったいどこからそのような逸材が発掘されたのだろう……とゴシップ好きな人たちは随分と話題に挙げていたようだ。

ただ、実際にはただの奨励会6級。何をそんなに騒ぐことがあろうか、と思う。

「いやあ、それがですよ。女の子どころか若者とも思えない」

「そうなんですか」

「これなんだけど……」

盤面には、ひねり飛車の局面が出現している。しかも、後手は左の金が出ていく戦法……いわゆる「タコ金戦法」と呼ばれるもののようだ。

「確かに古いですね」

「しかもこの後、金を地道に動かして押さえ込んでいくんだよ」

「へえ」

「で、この戦法選んだ理由が、『名人の手がしっくりきたから』って」

「名人？」

「小川名人」

「はあ……」

昭和の大名人の名前が出てくるのは、確かにすごい。すごいがおすすめかと言われると悩む。

「まあ将棋もすごいんだけどね。本人が全く強そうじゃないんだよ」

「そうなんですか」

「内気でおどおどしてあんまりしゃべらなくて。勝ちたいとかそういうのも感じられないけど、将棋を始めるとちょっと空気が変わるというか。不思議な感じ」

「へえ」

「でもかわいいですよ。こう、ツインテールで」

そのあとも先輩の説明は続入けれど、そんなに興味はわかかなかった。勝負の世界に入ってきたら、ライバルとして見るに値するかどうか、だろう。かわいい子を見たいならばこの世界の外へと目を向ければいい。高校に行けば女の子はたくさんいる。それでも行きたくないのだから、今の俺は女の子そのものに興味がないのかもしれない。

「あ、じゃあ僕はこれで」

控室もつまらない時はつまらない。なんというか、気合が乗らない時がある。きょうなどは気になる一局があったのだけれど、あの先輩たちと検討したいとは思えなくなっていた。

どうせ結果はわかっている。川崎四段の勝ちだろう。

俺より一学年上。小学生の時から何度も対局してきた。そして、勝てなかった。お互い奨励会に入っても苦手で、ダブルスコアに近かった。それでもなぜか僕の方が先にプロになれた。運が良かったのだと思う。

でも、彼も追いついてきた。デビューから五連勝。内容も全く隙がない。すでに周囲からは期待のホープと呼ばれている。

それは、俺のものだった。いや、今でもある程度は俺のものだ。けれども、これだけ勝っても何一つ達成できなかったことは、周囲の評価を少なからず下げている。順位戦昇級ならず、タイトル戦リーグ入りならず、新人戦決勝いけず、早指し戦本選出場ならず。面白いぐらいあと一歩のところまで負けている。そして多分、自分より強い三割の人にきっちり負けているのだ。

急にどうこうなるとは思わない。それでももう一つの目標だけは、譲れないと思っている。

川崎さんにだけは、負けられない。

会館から外に出る。このまま家に帰るのは、本当に虚しい。

「ふーん。不真面目なんだ」

大阪、将棋会館から少し歩いたところにある喫茶店。昔よく俺はここにきてゲームをしていた。家にいても楽しいことなどない。親はお金だけ渡していれば子供は育つと思っていたし、俺はあんまりお金の使い方を知らなかった。だから、喫茶店で少し高い食事をするのが精いっぱいだったのだ。

そして今、二人分のビーフシチューがテーブルには乗っている。

「そうですよ、知りませんでした？」

頬杖を突きながらけだるそうに話す女性。彼女は俺の姉弟子である、皆川女流二級だ。変な柄の入った赤いシャツに胸元にはネックレス。髪は茶色に染められていて、眉毛も細くきりっと描かれている。昔は爽やかな女の子だ

ったのだが、正直最近もったいないぐらい頑張りすぎている。

「でも高校は出といたほうがいいんじゃないの」

「なんか、そういうことに興味なくなっちゃたんですね」

「ふーん。じゃあやめるの」

「まだ決められてないんですよねえ」

「煮え切らない子ねー」

別に迷っているわけではないのだ。決断を悩むほどのことではないと思っているにすぎない。放っておけばそのうち退学処分になるだろう。決断などいらないういわけだ。

「まあ僕のことはいいいじゃないですか。それより用事ってなんですか」

「え、あー。うん。なんかこうさ、みんなで集まって将棋する機会とかあればって……最近ないじゃん？」

「研究会ですか」

「まー、簡単に言えば」

確かに昔は一門で集まって定期的に将棋を指していたけれど、弟弟子がやめたり僕が関東に移ったりで立ち消えになっていた。

「そうですねえ。じゃあその時は皆川さんこっちまで来てくださいね」

「え……なんで私が」

「皆川さん実家じゃないですか。うちならいつでも使えますよ」

「辻村の家で？」

「ほとんど物ないですし広いですよ。六人ぐらいは入れるんじゃないかな」

「そ、そうか。じゃあそれで」

研究会というのは、実はあまり興味がない。一人でする研究の方が、効率がいい気がする。それに、研究会では一方的に搾取する人がいる。協力する場面では、せめて努力する姿ぐらい全力で表現すればいいのに、と思うものだ。

とはいえ姉弟子の提案を断る気もなかった。彼女は見た目は派手になってしまったが、内面はとても実直で、僕は確にお世話になってきた。同時期にプロになり、何となく「同期」としても見ているのは内緒だ。

「じゃあ、よさそうな人いたら声掛けときますね」

「頼んだ」

断りはしなかったものの、忘れてしまう可能性は大きいと思った。

思ったよりも早く、その日が来ることになった。

新年度の順位戦 C 級二組、三回戦で俺と川崎さんは対戦することになった。

このリーグは、年に 3 人しか抜けられない。40 人を超える中からたった 3 人。三段リーグを抜けてきた俊英たちが、毎年何人も取り残されるのだ。

昇段後驚異的な成績を残してきた川崎さんか、昨年七割の勝率を残した僕か。どちらかが三回戦で負けるのだ。

他の勝負は、常に均等に対処してきた。実力を出せば七割勝つのは当然だし、三割は負けても仕方ないと思ってきた。けれども川崎さんとの対局だけは、意味付けをして考える。たとえ実力では下回っていても、どうしても勝ちたい。

ライバルというのは周囲が決めるものだと思う。川崎さんはこれから絶対に活躍する。その人のライバルと呼ばれるためには、勝つことが一番手取り早い。

もう、高校など行っている場合ではないと感じている。そこで過ごす時間を研究に充てている若手に抜かれたら、本当に笑えない。そして今日は、川崎さんの対局がある。観に行かなければならない。

電車に乗っている間も、将棋のことを考え続けた。最初はそんなに将棋の強い子供じゃなかったと思う。何にしる努力が好きなタイプじゃないのだ。それでも負けたら悔しくて、それを親に言ったら将棋教室に通わせてくれた。うちの親は、お金で解決することなら大体のことはしてくれたのだ。そして、そこで言われるがままに将棋を指して、詰将棋を解いて、棋譜を並べていったら強くなった。それが普通なんだと思っていた。そしていつの間にか、アマ五段とかになっていた。

プロになれる、と言われてその気になったのだ。俺にはそれ以外の取り柄がなかったし、早く何かで一人前になりたかった。家にいるのが好きじゃなかったから。

どこで停滞するでもなくプロになって、そこで初めて大変さというものを知った。強い人というのは、とことん強い。俺が勝てない三割の人たちは、まるで別の次元で戦っているのだ。

電車を下りて、歩いて。仕事場だけれど、対局がなければ一円ももらえない。将棋会館というのは不思議な場所だ。

棋士室には誰もいなかった。そういう時間もある。モニターに映っているのは、ベテラン同士の対決だ。最新研究とはかけ離れたクラシックな戦型だけど、こういうのも好きだ。将棋は何かを解明すればいいというわけではない。目の前の相手が力戦好きならば、それに対応しなければいけない。終盤型の棋士には、一気にまくられないように気を付けなければならない。参考にならない将棋などない、と思う。

そういえば今日は沢崎九段と三東四段の対局もある。沢崎九段はタイトル獲得歴もある偉大な棋士だけれど、最近は負けが込んでいる。他方三東四段はデビューした時から負けが込んでいる。すでに降級点を二つ持っていて、来期はフリークラスに落ちてしまう可能性すらある。まだ若いのに、存在感が全くない。

そんな三東さんだが、噂の金本さんの師匠なのだ。何となく気になる部分もある。普通の棋士が持っているような、しつこさや粘っこさというのが全く見られないのだ。ある意味それでプロになれたということは、天性の素質があるということかもしれない。

「いやー、まいったまいった」

大きな声を出しながら、影山六段が入ってきた。四十手前の先生で、豪快な風貌ながら細かい駆け引きを得意とする。

「あら、辻村君」

「お疲れ様です」

「うん。対局終わっちゃったよ」

「先生のがですか？」

「ああ。いやあ、まいった」

聞かなくても負けたというのはわかる。夕食休憩前に負けるというのは、よほど序盤から上手く指されたのか、途中で一手ぱったりがあったのか。

「そういえばね、あの子が記録係やってたよ」

「あの子？」

「金本さん。朝から三東君がしきりに頭下げててね。何でも奨励会入るままで棋譜取りどころか、ストップウォッチ使ったことも、お茶を入れたこともないとかで。幹事とも随分練習したらしいよ」

「そこまで……」

もうなんというか、将棋用に開発されたロボットじゃないかとすら思えてくる。あまりにも世間と離れていて、しかも女の子で、師匠は目立たない若手で。三東四段は実はマッドサイエンティストなんじゃないだろうか。

「でね、つっこちゃんがね」

「つっこちゃん？」

「月子だから。つっこちゃん、かわいらしいんだよ。ちょっとびくびくしてるけど、まじめそうで。今までいなかったタイプだね」

「へー……」

なんだか、こちらにも興味がわいてきた。年齢も大して変わらない、不思議な女の子。高校に行ってもなかなか出会えるものではない。

だんだん人も集まり始めた。何となく押し出されるように、部屋を出る。居づらいというのではなく、ふさわしくない空気の時があるのだ。そして今は夕食休憩らしく、対局室を覗いても棋士は見当たらなかった。

「あっ」

誰かが、俺の足を踏んづけた。そして、かわいらしい声。

「ご、ごめんなさい」

「いや、別に。……つっこちゃん？」

「え、あ、はい」

背は低くて、体の線は細くて、サラサラの髪はツインテールに結っていて。子リスのように動く様は、とても将棋を指す人だとは思えなかった。そして俺の胸は高鳴っていた。こんなことは初めてだ。

「俺……辻村って言うんだ。四段」

「わ、私金本です。4級です」

ただ、ぶつかっただけなのだ。もうこれ以上話すことはない。けれども、それで終わらせてはいけないと思った。何かきっかけを、口実を、理由付けを……

「つつこちゃん今度さ、うちの研究会来ない」

思わずそんなことを言っていた。皆川さんとこの間話しただけで、そんなものまだ開催したこともないのに。

「……え……私、そういうのよくわからなくて……」

「いやまあさ、対局したり検討したり、ご飯食べたりゲームしたりするんだ。皆川さんも参加してるしさ、考えといてよ」

「……はい」

やった！ しかしこれでは社交辞令で終わってしまうかもしれない。

「また詳しいことは連絡するしさ、メアド教えてよ」

「……メアド……は……ないです」

「え、携帯は？」

「……持ってないです」

「じゃあ電話は？」

「一応……。先生が出るかもしれませんが」

「……えっと……まあいいや、じゃあ電話番号教えてよ。またかけるからさ」

先生が出るかも、というのは気になったけれど、電話番号を交換することには成功した。月子さんにメモを渡し、僕も手帖に番号を書き込む。確かに市外局番からだった。

「じゃあ、今度連絡するね」

「は、はい。よろしくお願いします」

体が少し軽くなっているような気がした。そのまま玄関を出て、ご飯を食べに行くことにした。これまで選択肢に入れたこともなかったけれど、鰻を食べたくなってきたのである。

少し降り始めた雨は、結構強くなってきていた。それを見越して先に帰った人もいるようだ。

傘なんて持ってきていない。濡れるのは構わないけれど、そのまま電車に乗るといのは悪手というものだろう。

そして、気付いた。つつこちゃんはどうするのだろうか？ 女の子がこんな時間に一人で帰るだけでも危ないのに、この雨だ。ここは送っていくのが紳士的なのではないか。そうに違いない。

再び対局室を覗いたが、すでに対局は終わっており、誰もいなかった。棋士室にもいなかった。靴を確認すればわかるかと思い玄関に下りていたら、ちょうどそこに彼女はいた。玄関を出てすぐのところで、空を見上げていた。

「つつこちゃん！」

「あ、……辻村先生」

「今から帰るの？」

「はい。でも、雨ですね……」

「送ってくよ。丁度俺もタクシーで帰ろうと思ってたところだから」

「え、いえ、そんなタクシーだなんて……贅沢なことは……」

「いいいいいよ、気にしないで」

つつこちゃんは押しに弱い、と信じて、そのままタクシーを拾い乗り込んだ。幸い俺の家とそんなに遠くはないようだ。

「じゃあ、つつこちゃんをまず送るよ」

「……すみません……」

「先輩にはお世話になればいいんだよ。お世話する立場になっていくんだし」

と、俺が依然言われたまんまの言葉を拝借する。実際今の自分はお金を稼ぐ一方で、こういう時でもないと思

どころがない。

「つつこちゃんは、どうやって将棋覚えたの」

「え……はい、父から教わって」

「お父さん強いのかな」

「一応アマ六段とか……」

「へー。結構強いね。それで三東先生を紹介されて？」

「はい、知り合いだったみたいで……その、先生のところを訪れて」

「お父さんが？」

「いえ、私が」

「一人で？」

「はい。それ以来ずっとお世話になってます」

「ふうん。でも、家近くなんだよね。親御さんは来なかったんだ」

「家は……その、近くないです。自転車で一晩かけて……」

「……え？」

おかしい話になってきた。東京に金本なんて強豪いたっけな、などと考えていたのだ。一晩かけて自転車で？

「じゃあ、今の家は一人で？」

「いえ、先生と住んでます」

「内弟子？」

「そうとも言うみたいですわね……」

いまどき内弟子なんて話、なかなか聞かない。しかも女の子である。しかも稼いでない若手棋士が師匠である。聞けば聞くほど謎が湧き出てくる存在だ。

「あの、このあたりです……」

どこにでもあるようなアパートの前。どちらかというとおしゃれな感じだった。お金を払い、タクシーを降りる。雨は小降りになっていた。

「ちゃんと師匠のところまで送り届けるよ」

「え、あ、はい」

本当のところは、確かめたかったのだ。あの三東さんと、このつつこちゃんが一緒に暮らしているなんてことがあるのだろうか。あるとしたらもうなんというか、いろいろ問題あるんじゃないか。

「あの……私からもお願いします、せめて何かお礼を」

「え、いやそれはいいけど……」

「私持ち合わせがなくて……色々とお世払いなんで……」

もう尋ねるのはやめた。いるというのなら三東さんに直接聞くのが一番よさそうだ。

階段を上がり、廊下を歩いて三番目の部屋。月子さんはゆっくりと扉を開けた。

「あの……遅くなりました」

「ああ、おかえり」

それは、まぎれもなく三東さんの声だった。

「あの、入ってください。……実は、辻村先生が送ってくれて……」

つつこちゃんは部屋の中に入っていったが、俺はしばらく玄関で立ち尽くしていた。想像通りのそれほど広くない部屋。普通は一人暮らしをするサイズだろう。しかしピンク色のコップ、パソコンの前に置かれたぬいぐるみ、ハンガーにかかったカーディガン、全てがつつこちゃんのいる生活を物語っていた。そしてそれ以外は、ほとんどが男性のものだった。

「……本当に……一緒に暮らしていたんですね……」

ようやく出てきたのは、そんな言葉だった。

「色々とおあるんだ。まあ、上がりなさい」

三東先生は普段とは違い、父親のような落ち着きを見せている。テーブルの前にどっしりと座り、こちらへと手招きしてくる。先輩が導くのなら行くしかない。

「あの……先生……」

「ん？」

「私タクシー代持ってなくて……」

「まあ……辻村君、そういうつもりじゃなかったんだろ」

「え、ええ……」

「どういうつもりだった？」

「え？いや、何も……」

下心がなかったと言ったらうそになる。けれどもそれを正直に言う場面でもない。

「ここからどのくらい？」

「あ、そんなにかからないです」

「じゃあ、これで帰れるかな」

「え、いや……これは……」

三東さんは千円札を俺の方へと差し出した。たぶんタクシーに乗ると、少し余る。どうしていいものかと思ってきたが、三東さんは無理やりそれを俺の手の中に押し込んでしまった。

「コーヒー飲む？」

「え、はい、いただきます……」

「月子さんも飲む？」

「はい」

「じゃあ、待っててね」

三東さんの入れたコーヒーを飲む間、俺たちは一言も話さなかった。自分がちっぽけに思えた。そして、ちびちびとコーヒーを飲むつこちゃんは、やっぱりかわいかった。

「うーん……迷うよね」

十時半。棋士にとっては健康的ともいえる時間、俺たちは服を選んでいて。

「違いがわからないんですよ。私服とかほとんど買わなくて」

ショップに一人で入るのさえなかなか勇気がいる中、皆川さんはずんずんと入っていくことができた。普段からおしゃれには時間をかけているようなので、何ら抵抗はないようだ。

「辻村はなで肩だからねー。似合わないのも多そう」

皆川さんはいろいろな服を進めてくるのだが、そもそも何がいいかわからないから一緒に来てもらったのだ。どんな服でも「これにしろ」と言ってもらえれば納得するのだが、本人の意見を尊重するタイプらしい。

「あ、このジャケットいいかも」

とりあえずこのままでは持ち時間が減っていくばかりなので、直感に頼ってジャケットに手を伸ばしてみた。紺と青の中間のような色で、ボタン穴が普通のものより大きいような気がする。

「え、いいけど……それ……」

「問題あります？」

「値段」

「75000 円ですね。持ってますよ」

「……まあ、本人がいいならいいけどね」

だいたい服の相場なんて知らないんで、気に入ったものが予算内なら買えばいいのだ。今のところ家も車も買う予定がないし、欲しくなったころにはタイトルでもとって大金をもらえばいいのだ。

「じゃあさ、パンツはこういうのどう」

「あ、いいですね。えらい細いもんですね」

「辻村なら大丈夫でしょ」

なんやかんやで、服を選ぶのが楽しくなってきた。あまり人に見られるということを意識したことがなかったけれど、着るものによって僕はずいぶんと違って見えることだろう。これまでの俺にとって対局以外の時間はただの準備期間でしかなかった。誰にどう思われようとよかったのだ。

けれども、今はそうじゃない。俺は、勝負に勝つためには努力を惜しまないつもりだ。何せ相手は、同じ屋根の

下で暮らしているのだ。

「意外に楽しそうに買いものするんだね」

「自分でもびっくりです。あ、でも一人だとそうじゃないかも」

「え、そ、そう？」

これまでは必要なものさえあればよかった。欲しいものができても、ネットで注文することが多かった。買い物に来て、研究の時間を削っているような後悔に襲われたのだ。

今はとにかく胸のざわめきを止めるのが先決だ。そのためには早くかっこよくなりたいし、こういう時間を楽しみたい。多分他の棋士もこういう悩みを抱えながら戦っていて、乗り越えた人がタイトルに届くんだろうな、と思った。全てにストイックな人はどこかで折れてしまうだろう。

「時間あうなら、まあ別に、いつでも誘ってくれれば一緒に来てあげてもいいんだけどね」

「ありがとうございます。またお願いします。あ……あと」

「なに」

「あれです、スーツのオーダーメイドってのをしたいんですよ」

「……本当に、急にどうしたの？」

本当にどうかしてしまっているのだ。そして、原因はわかっているので対処しようとしているわけだ。

「実は……好きな人ができたんです」

言ってしまった。誰かに言わずにはいられなかったし、一番信頼できる相談相手になってくれると思ったのだ。

「……え？」

しかし、俺の読みは外れていた。皆川さんは動きを止め、信じられない、といった表情でこちらを見ている。

「いや、俺もこの歳ですから。それぐらいできますよ」

「その……えーと、私の知ってる人？」

「どうでしょう。名前ぐらい聞いたことあると思います」

「……そう。頑張ってね」

急に皆川さんは口数が少なくなってしまった。ガキのくせに、とか思われたのだろうか。それとも意外なこと過ぎて戸惑っているのだろうか。

女性に対する研究も、もっとしていかなければならないようだ。

夜中電気を消すと、カーテンの隅から細く薄い光だけが差し込んでくる。カーテンのない時には気が付かなかったけれど、夜というのはさびしい。暗くなった部屋の中、一人布団の中で目を開いていると、世界から見放されているような気分になる。そんなわけで目を閉じるのだけれど、そこにもやはり闇が広がっている。頭の中に将棋盤を浮かべるのだが、そうするといろいろと疑問が生まれて、起きて調べたくなってしまう。

実家にいるときは、家族なんて鬱陶しいものだと思っていた。俺にたいして興味がないのに、義務を果たすためにいろいろと世話をしてくれる人たち。両親が「どうせなら作家とかに興味持ってくれたらねえ」と言っているのを聞いてしまったこともある。将棋なんて、という思いは常に伝わってきた。それならばせめて止めてくれ、と思ったこともある。

それでも、そんな家族でも、同じ屋根の下にいただけで安心できたらしいのだ。どんな暗闇でも、叫べば誰かが駆けつけてくれる。熱を出せば、病院に連れて行ってくれる。

カーテンを買わなかったのは、闇を恐れる潜在意識のなせる業だったのかもしれない。

かと言って電気を点けたら眠ることができない。それはもう、体が受け付けないのだ。難儀だ。

つつこちゃんには、三東先生がいる。どんな関係かはわからないけど、そばに誰かがいるだけで随分と安心できるだろう。その役割は、俺ではだめだろうか。

立ち上がり、カーテンを七割開ける。明日のために、眠らなければならない。

父の指す穴熊に見える残響音《東大安田講堂事件》（半島）



作品紹介

将棋小説「ベース オブ シークレット」 清水らくは

『駒.zone』というタイトルと同時に浮かんだ物語です。もちろんあのヒット曲から連想しました。基本的に筆者はハッピーエンドしか書けないため、必然的にあのような結末に。自分では斬新な設定 のつもりでしたが、執筆中に新棋戦設立のニュースがあり「海外選手招待」という報が！ あと一か月早く発表できれば……。そして、こんなベタなもの書いた の初めてですが、楽しかったです。

将棋短歌「穴熊」 半島・落波

日ごろお世話になっている半島さんにご協力いただき、スカイプでお話ししながら短歌を作っていただきました。最初はテーマ詠だけだったのですが、そのうち 詰将棋や必至問題のヒントを詠むという聞いたことのない形に。そのあと自分でも作ったのですが.....実は詰将棋作るのが苦戦。ただでさえ苦手なのに、穴熊と という条件は大変でした。余詰めあったら教えてくださいと助かります。

写真物語「お城はあきた」 清水らくは

映像的なものを入れてみようと思いました。が、作者の古いデジカメではうまく撮れず、携帯で写真を撮ることに。荒い画像で申し訳ないです。将棋を指しているとき、王将がするすると逃げていくのはなかなか楽しいものです。続きも制作できたら次号で。

将棋詩 「3六歩」 清水らくは

とある対局で登場した驚愕の一手を題材に書きました。プロの将棋は関数的で、突然駒の損得を超えた効率やスピードという要素が重要になったりします。どの要素を重視するか、そのコントロールがプロの技なんでしょうね。

将棋詩「一番長い日の一瞬」 清水らくは

たまにこういう
ての込んだ
よくばったものを試して
みたくなるのです。

ツイッター対局 「金本月子×ぜいらむ」 @Zeirams @tsukiko_sann @rakuha

ツイッターでお世話になっているぜいらむさんに頼んで、『五割一分』に登場する金本月子プロとツイッター上で対局してもらいました。諸事情により月子さんは筆者程度の実力しか出せない状態でしたが、「ハンデがほしい」ということで三択チャンスルールを採用。その結果……。今後もルール を変えてやってみたい企画です。

将棋小説 「七割未満」 清水らくは

本誌が実現する最大の要因であったともいえる『五割一分』のスピノフ作品です。辻村君の魅力をもっと伝えたいという思いから書きました。三東先生と違い一人称が難しいキャラでしたが、書いていて楽しい部分もありました。

あとがき

きっかけは単なる冗談でした。

【昨日から「夏休み秘密基地で二人将棋を指す子供たち」の話を書きたくなってきてしょうがないのです。「駒.zone」というタイトルを思いついて……】

ツイッターでこうつぶやいたところ、予想外の反響が。そこから色々と想像が湧いてきて、「将棋文芸誌、あってもいいんじゃないか」と思うようになったのです。

三年ほど前から将棋を題材に小説を書き、投稿などもしてきました。その頃はプロになりたい思いでいっぱいでしたが、多くのアマチュア作家、特にボーカロイドPの方々に刺激を受け、「とにかく発表して、読んでもらおう」と思うようになりました。そして最近ではpdfで発表するなどして、温かいコメントを頂けるようになりました。

また、将棋をテーマにした漫画や小説なども数が増え、将棋ファンも多様化するなど将棋を取り巻く状況は好転しているように思えます。僕も何かその輪の中に参加したい……その思いが雑誌制作の原動力でした。

ツイッターでコメントをくださった皆様、作品を提供してくださった半島様、ぜいらむ様、表紙のイラスト提供してくださったまるぺ様、目次の題字を提供してくださった Keishogi 様、そして元ネタとなった素敵なフリーペーパーを作っている皆様、さらには素晴らしい勝負を見せてくれるプロ棋士の皆様。多くの方のおかげで何とかこのような拙いものですが完成させることができました。次号も私の余力と皆様の寄稿があれば作ることができますので(笑)、どうか よろしく願いいたします。

ご連絡はこちらまで rakuha@hotmail.com

最後に……ちょっとだけ宣伝させてくださいな。

★清水らくはの将棋小説

『五割一分』 <http://p.booklog.jp/book/9374>

『レイピアペンダント』 <http://p.booklog.jp/book/18766>

『明日こそジンジャーティー』 <http://p.booklog.jp/book/22197>

あと、作品中の図面作成には「局面図作成」というソフトを使用させていただきました。こちらも大変便利でお世話になりました。ありがとうございます。

それでは、また会う日までさようなら！

作者紹介

清水らくは(落波) 小説・詩・短歌・写真物語

本業は倫理学の研究者。三年前から将棋小説に挑戦。最近横歩取り 3 三角さんに浮気していることが 3 三桂ちゃんにばれそうではらはらしています。月子さんの成長に実は一番驚いている人。

あの……できれば私もう少しお金持ちで、家族がまともだとよかったかなと作者を恨む……こともあったりなかったり……(月子)

半島 短歌

短歌をつくるのが趣味な一般人。将棋のことはよくわからないのに将棋漫画を読むのが好き。「俺の棒銀は銀河を突き抜けて、未来を穿つ！」などという中二病的発想が大好きです。皆川さんの永遠の内弟子になりたい。

ちょ、年上には興味ないんだけど！ いや別に好きな人が年下とかじゃなくて一般的にというかなんというか(皆川)

ぜいらむ 対局

えーと、駒 zone 読者の皆さん、こんにちは！…Twitter で作者さんにお世話になってる 17 歳になったばかりの全手動 bot のぜいらむです。好物は妖怪です。時々食べます。中でも、さざえ鬼が特に美味しいと思います。好きな囲いはダイヤモンド美濃囲いですが、ダイヤモンドがあれば美濃囲いなんてなくてもいいと思うんですよ、ええ、ええ。あと、辻村君が月子のニーソを狙っているみたいなので、彼とはいずれ決着をつけなければならないでしょうね。

今回は大変お世話になりました。ですがニーソは……その……先生がセールで買ってきてるんですよ？ (月子)

まるぺけ 表紙絵

この世界に twitter があつたら急にお洒落になった（でもすごい鈍感そうな）辻村くんにつっこみを入れまくると思います。そんな感じの将棋ファンです。夢は将棋関係の旅行で日本と世界を征服すること！

最近は最新流行にも敏感なつもりだけどなあ。旅行ならばやっぱりイタリア、ローマとかじゃなくてジェノヴァのドゥカーレ宮殿とかで(以下略) (辻村)

Keishogi 目次題字

自称、若さ溢れる好青年。将棋指せる彼女が欲しい今日この頃。本編に無関係ですが将棋界では香川さんが好きです。実は凄く字が下手。題字とか書きちゃってごめんなさい。

題字、すごくいいと思いましたよ……で、私じゃなくて香川さんなんですね……(月子)